

新・平家物語

第十卷

新・平家物語

第十卷

新・平家物語 第十卷 (全十二卷)

定 価 三五〇円

昭和三八年三月二五日第一刷発行

著作者 吉川英治

発行者 伴 俊彦

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 東京小倉
大阪名古屋 朝日新聞社

© 吉川英治 一九六三年

第十卷目次

やしまの巻(続)

三

浮巢の巻

二七

壇ノ浦の巻

二五七

装幀 N D C 原 弘

やしまの巻(続)

そと退き候え

海上の平軍は、ひそかに勝算をもった。部将から士卒の端までが、

『勝は、お味方の上にある』と、かたく思い、

『いまに見よ、源氏のやつばら。目にも見ようぞ』

『あの誇らしげな白旗や白い幟も、あわれ、二日の命でしかあるまいに』

と、沖からそれをながめていた。

おそろしいものである。そうした意気は、平軍の船の一つ一つにもすぐあらわれた。やがて、陽も中天のころには、大小の船列二百余艘が、整然と海上陣を布き、紅の旗は翻翻として碧瑠璃を染め、そのさかんな士気は、幾条もの虹を沖へかけたようであった。

——さつきから牟礼の岸に駒を立てて、平家の水軍のうごきを見ていた義経は、

『……はて？』

と、ひとりつぶやいたことだった。

『さしも一時は、あわてふために、乱れにみだれて見えた船影であったが、平家の内にも、さすが、よい大将もおるらしい』

かれのすこし後ろには、武藏坊弁慶、伊勢三郎義盛、那須余一、同じく大八郎、伊豆有綱、畠山重忠、佐藤継信、忠信の兄弟などの面面。

また、近くの磯松原の間には。

田代冠者、金子十郎、後藤実基、その子基清、そのほかの東国武者が、轡をならべ、ともに、沖の方を凝視していた。

義経は、振り向いて、

『のう、あれ見たか、殿輩。——敵ながら、またたくまの船ぞろい、見事な陣の立てよう。よく見ておくがよい』

と、いった。そして、降参の将、近藤六の顔へ、
『平家の水軍を指揮しおる者は、だれなるか』
と、たずねた。

近藤六は、徒歩だった。馬の尻の陰から、

『能登どのにござりまする。門脇殿の御次男、能登守教経どので』

『では、鵜越えの合戦のおり、明泉寺の陣所より、われらの軍に駆け落され、あえなく討ち死にされた三位通盛卿の舎弟よな』

義経は、もいちど沖へ、眸をこらした。

鵜越えや一ノ谷で討たれた平家の子や兄弟やその親どもが、仇たる自分へ鐵を研ぎすましている血相が、海のかなたに見えるような気がした。

吹き渡ってくる潮風に、かれは、ぞくと身ぶるいを覚えた。同時に、われともなく、

『やあ、油断すな人びと。敵の兵船に、戦意がみゆるぞ』

と、きびしい声で叫んでいた。

果して、中型の兵船が、幾十艘となく、沖の陣を離れて、こなたへ漕ぎ進んで来る。

その中に、馬立ち船も交じっているとこを見れば、かれも騎馬隊を上陸させ、一戦の決意をもって来たものにちがいない。

ちようど、干潮時の底もすぎて、やや上げ潮を呈してきたころである。

まだ、牟礼の岸は、かなり遠くまで干あがつてい、屋島との間も、干潟の地はだを見せていた。

義経は、磯松の木陰を駆け出して、

『近づく敵に、汀を踏ますな。陸にも取りつかぬまに、射てたおせ』

と、麾下へ呼ばわった。

かれにつづいて、波打ち際へどっと駒音をそろえた武者たちは、矢つがえ忙しく、

『ござんなれ』

と、漕ぎ寄る群れに、矢ごろを測って、待ちかまえた。

すると、まだ距離として、到底、矢も及ばない所で、平家方の船群は、突然、二手にも三手にも分裂し、西へ分かれた一組は、屋島の岸へ上がり、東へ離れた兵船の幾艘は、八栗半島の岸——五剣山の下あたりに——続々と兵をあげ始めた。

『や。三方からこれへ攻めかかる備えとみゆるぞ』

源氏の軍勢とその白旗は、ひとつ所にかたまつて、吹き戦がる穂のように、おめきあつた。

『ここは危い。三方からつつまれては』

田代冠者信綱の口走りらしい。

それにつられて、一角の厚い人数が、早くも、ほかの足場を求めるように、なだれかけた。

その駒足へ、するどく、

『みだりに、陣をみだすはだれだつ』

と、義経の叱咤が飛んだ。

『敵は前に見ながらも、われには船を持たぬ惜しさがある。と同様に、敵はいと乏しき馬数しか持つておらぬ。さるを、かれより陸へ向かつて戦いを挑んで来たのは、何よりの幸せだ。——見よ、三面の敵とても、屋島、八栗へ上陸した敵は、すべて馬を持たぬ徒士のみではないか』

『おお、いかにも、かなたへ上がった兵は、みな脚立ちの武者ばかり』

『田代殿は、五十騎にて、八栗の口を防ぎに立ち候え。』

いかに敵より挑み誘われても、騎馬駆けならぬ小道にまでは、ゆめ踏み入り召さるなよ。——また、屋島の干潟は、後藤実基、淀ノ忠俊、金子十郎たち五十騎ほどにて駆け向かえ。そのほかは、ここの汀を、動くまいぞ。義経も、敵の真向にいて、近よる平家の健気者に、一と合戦してとらせんものを』

かれの声は、その小柄な体に似ず、よく徹った。

また、軍勢のうちの多くは、兄頼朝の御家人であり、軍目付たる人すらあるので、凜たる命令語にしても、ことばはきれいで、こんなさいにも、麾下の感情というものを忘れていない。

たちまち、源氏方も、扇なりに、人数をひらき、右翼の一軍は、八栗の海沿い道に備え、左翼は、屋島の干潟を前に、総門の焼け跡に、敵を待った。

その間に——

敵の主力とみえる数十艘は、すさまじい櫓声の中に、波しぶきを見せながら、ぐんぐんと汀へさして近づいていた。

おそらく、船上にある平家の将も、ここにある一団

の鉄騎と白旗のうちに、九郎義経のいることを、はやくも眸にしていたにちがいない。

すでに、牟礼の浜は、烈しい弦鳴りと矢風を起こしてい、同時に船上の方からも、矢ぶすまを作つてそれに報いて来た。しかし、近づく平軍の船脚は、いささかな怯みもみせず「——一ノ谷以来の宿敵、判官義経、そこ動かなかれ」といつているような烈しい形相と戦意が、まっ黒にむらがり寄つて来る船中の一つ一つの姿にもうかがわれた。

わけても。

越中次郎兵衛盛嗣は、さきに総門を攻めつぶされ、その雪辱に燃えていた。

味方のだれの船よりも、まっ先に、ざつと、浦の一角へ、その舳をぶつけるやいな、盾囲いから、ぬつと起ち上がつて、

『今晚、いちどは、不覚な負けを取つたれど、正しき勝敗を決せんため、越中次郎兵衛盛嗣、ふたたび、これへ参つたり。——むかし、鞍馬の稚子して、金売商人の所従となり、陸奥に落ち下りし小冠者、今は判官

とやらになつて、おこがましくも、討手の大將軍を称えてこれへ来つる由。その九郎の小冠者にこそ見参せん。九郎義経はいずこにあるや。平家の矢前をおそれて、身を潜めおるか。恥を知らば、これへ出て、雌雄を決せよ』と、大音声でいつた。

敵味方の陣頭から、おのおのひとりずつ、気負いの者が出て、居丈高な戦さ名乗りをあげるのは、まず、われの宣言と、士気の昂揚をかねたもので、合戦に先だつてよく見られる当時の戦闘形式といつていい。

『しゃつ。すでに、けさの一戦にて、金子が弟、親則の矢を食らつて、総門を逃げ落ちし亡者めが、わが殿にたいして、舌長な広言を——』

すぐ、源氏の中から、こう、わめき返した者がある。たくましい黒革ぞつきの甲冑を馬上に見せつつ汀へ駆け出して来たその一騎は、

『いりもおろかなれど、わが大夫判官どのは、源家の

嫡弟、なんじら如き者と、矢交ぜ^や交ぜを争う君には非ず。かくいう伊勢三郎義盛が、あしろうてくれよう。盾の陰にて、臆病腰^{おくびょうこし}の雑言^{ざうごん}やめよ。物申すなら、これへ出て物申せ、次郎兵衛とやら』

と、あざ笑った。

越中次郎兵衛は、早くも、馬立ち船へ跳び移って、

その中の一頭の背へ身をおき、

『おうっ、そう申す男は、以前、伊勢の鈴鹿山^{すずかやま}にて、山賊など働き、後には、江ノ浦の辺りに、漁師^{うしなかり}などしつ、細ぼそと、妻子を育^{はぐ}みいたるあぶれ者の後身よな。さすが、流浪^{るろう}の殿とは、似合いの主従。首さし伸べて待つがよい』

『やあ、人は知らじと思うてか、北国の俱利伽羅^{くりがら}に打ち負けて、乞食^{こじき}しつ、からき命を拾って都へ逃げ帰りし醜武者^{しうむしゃ}が、人並みなる申し方^{かた}よ。二度と、広言のならぬように、伊勢三郎が、その息のねをとめてやる。いで参れ、醜^{しう}の次郎兵衛』

『なにを』

盛嗣^{もりつぐ}の姿は、馬もろとも、まっ白なしぶきにつつま

れた。馬立ち船の上から浅瀬を駆け渡り、おめきかかつて来たのであった。

この浦曲^{うらま}の水際は、いちめんといいてよいほど、白波、しぶき、人馬の喊声^{かんせい}が、ほとんど、時もおなじに、わき上がっていた。

すでに、朱^{あか}をなして、屍^{かばね}を波に洗われている者、絶叫のもとに、一矢^{いつし}を喉^{のど}ぶえに突き立てられて、のけ返る馬、馬上と馬上との白刃^{せんじん}の閃閃、組んずほぐれつの上の格闘、それを、一幅の絵巻と見るには、余りに凄愴^{せいそう}であり、これを人間所業の一齣^{ひとま}と観るには、余りにもかなしい約束ごとであった。

さつきから、波上^{はとう}の一艘に、なお、双^{そう}の眼をとぎすまししながら、船屋形を盾^{たて}に、陸^{くわ}を見ていた平家方の一将がある。

能登守教経だった。

——落ち着いている。

かぶとの眉廂^{まひさし}の翳^{かげ}となつてゐるその白哲^{はくせき}の面^{おもて}と、り

りしい唇元は、何かを、捜し求めているふうだが、しかし、おりおりの矢うなりの中にさえ、さつきから、身じろぎもしていない。

いかにも、心のうちに、勝算がありげな容子である。

もう、二日後には、三千の味方が、伊予路から引き返して来よう。かれら源氏の背後に、突如、その紅旗が見えたときこそ、ここにある限りの東国武者が、降伏か、殲滅かの、さいごを必然とする日なのだ。

——あわてることはない。

教経の眸は、それを反覆しているように、静かであった。

だから今は、われから仕懸けた戦さでも、じつは源氏をこの浦に引きつけておくためのなぶり合戦に過ぎないのだと、かれは充分、知っている。——そう自分にもいいきかせている。

にもかかわらず、かれの面には、ときどき、足もとの波映ともつかず、何か、むらっと、かげろうの如き殺気がしきりにうごいていた。

陸の乱軍のなかに、たとえば、密林を翔けるきれい

な鳥の羽色のように、源九郎義経らしき華やかな影が、かれの眼に、ちらちら見えていたからだった。

——それもある。

たしかに、それもかれの血をたぎらせたには違いがないが、もっと大きな理由は、目前に、自身の部下が、屍を積んでいることだ。

一つの策ぞ、と心得ていても、やはり戦さは、犠牲なしにはできない。一個の流す血の色にも、千人を盲目にし、万人を怒らす何かがある。まして、岸へ上がった平家勢は、みるみるうちに、東国武者の鉄騎の下に蹴ちらされていた。

ことに、義経とおぼしき人の前に駆け向かった味方は、その太刀に薙ぎられたり、斬り下げられて、たたかれた花のように、紅の露命をあたりに散らしていた。

『——菊王っ』

もう、たまらなくなったものに相違ない。教経の荒い語気と一しよに、かれの頭が、燦として、うしろを向き、

『その馬立ち船、いやその續綱を、ぐつとこちへひいて来い。そして、駒の口を取れ』

と、命じた。

日ごろ、かれがそばから離さず可愛がつっていた童武者の菊王丸は、すぐ、主人の突っ立っている船屋形のわきへ、馬立ち船を引き寄せた。

舷から、駒の背へ、ひらと、跳び乗るやいな、教経は、ざざざと、修羅の汀へ駆けあがつてゆき、

『やあ、そこ退き候え。矢面の難人ばら』

と、鉄の弓手を突き出した。

そして、あたりの東国武者を目がけ、びゅんびゅんと、射ながら駆けまわった。

騎馬は、東国武者が無敵と誇るところのものが、平家の公達にも、馬下手ばかりがいたのではない。

教経は、水軍の術に長けていたばかりでなく、陸戦の雄でもあった。わけて、騎射のじょうずで、近矢を得意とし、太刀も長柄でとどく近さまで敵に馬をぶつけて行つて、いきなり、その顔や胸板に一矢をくれ、同時に、まるで蝶か鳥のように、鮮かに馬を翻すので

あった。

継信の死・菊王の死

『能登どのだ』

『能登どのぞっ』

かれの勇姿は、どこを駆けていても、すぐ分かった。かつての坂東武者は、よろい具足も小袖も、じつに質素で、ひと目でそれと分かったものだが、近年の東国勢は、みな華やかになっている。いずれが平家、いずれが源氏とも、見分けがつかない。

そうした乱軍の中で、教経の姿一つが敵味方の目をひいたのは、かれが唐風な鎧や、唐巻染（しぼり染）の小袖を着、太刀や馬具のことに見事だったせいばかりではない。

かれが行く所、まるで無人の境に見えた。鉄騎の壁も、蹴ちらされ、その矢前に立ちうる敵もなかった。すでに、かれの駆けたあとには、十騎以上の敵が、

射捨てられている。しかしかれの目ざす者は、義経以外のだれでもないのだ。

『やあ、そこ退け、そのけ。雑人輩に用はない』

教経は、残り少ないえびらの矢を射惜しむかのよう

に、
『これは、門脇中納言の一子、能登守ぞ。はるか来つる九郎どのの勇を愛でて、一騎と一騎、人交ぜもせず、会わんとは思ひなれ。九郎どのへ見参せん。九郎判官は、いずこにあるや』

と、ほかの敵へは、眼もくれなかつた。

義経は、さつきから、上陸してくる平軍を、序戦に悩ませて、汀から半町ほど後ろの、一叢の松の木陰に馬を休ませていたが、

『おお、あの平家武者は』

と、こなたへ向かつて来る若獅子のような姿へ、きつと眼をつけて――

『さすが、健気さよ。あれなん、聞こゆる能登どのか。望みにまかせて、一戦さを交じえてくれよう。そこ開け、味方の殿輩』

と、にわかに馬を遣ろうとした。

付近には、江田源三、熊井太郎、伊豆有綱、武蔵坊弁慶、佐藤継信、忠信などが、一面に馬囲いを立て並べていたが、

『や。お待ち候え』

と、弁慶がまず、義経の前を、立ちふさいで、

『お旗の下に、人もないではおざらぬ。阿修羅となつた捨身の敵に、君御自身、おん身をさらすなど、大將軍の振る舞いとも覚えません』

と、押しとどめた。

義経は、いつになく、

『いや、敵も水軍の大將ぞ。むかし、待賢門の戦いには、悪源太義平どのと、平家の嫡男小松殿（重盛）とが、一騎と一騎の勝負をなした例もある。――能登どのだに、討つてとらば、平家は、力を失うて、潰え去らん。無用な長戦さに、多くの死者傷負を出すよりは、どれほどましか。そこ退け弁慶』

と、叱咤した。

けれど、ほかの諸将もみな、どつと義経の前に、厚

い鉄陣を作りあつて、動こうとしなかつた。

そのまに教経は、もう、ついそこまで、迫っていた。人も馬もすでに血に酔っている勢いだった。

『九郎どのは、どこ。出合い給え、出合い候え』

と、求める声もしやがれて、何か、人間の叫びとも思えないものがある。

『やつ、推参』

『駆け寄らすな』

源氏の数騎が、矢前に出た。

ひとり、その鐵下がりやじりもとを潜くぐつて、

『組まん』

と、教経へ、ぶつかつて行つたが、教経は、身をひねつて、敵の顔の真ん中へ、びゅんと、一矢いちしを与え、

『あたら、犬死にすな』

と、もう次の鐵やじりを、次の敵へ、向けていた。

つづけさまに二、三度、弓弦ゆづるが鳴つたと思うと、かれの矢先には、かれの方へ顔を向けてくる敵もなかつた。そして、どつと左右へ退き開いた馬群のかなたに、義経の姿が、ちかつと見えた。

『おお』

と、教経は、なお、駆けつめて、——「あわれ、平家の氏神うじがみ、敵島大明神あきしまだいめいじん、この一矢に、敵将九郎判官を射とめさせ給え」と、念じるほか、何ものもない眸めだった。

びゅんーっ

と、弦音つるおとがした。

『——あっ』

と、矢面やおもての諸将も、思わず揺れた。

ある者は、身を伏せ、ある者は、馬を外そらした。烈しい唸りうなりをもつて、その上をかすめて行つた矢は、一将の左肩部さかけたを、射抜いた。どうつと、その者の体は、馬の背からまろび落ちた。

『や、や。繼信つぎのぶぞ』

悲痛な声で——

『誰ぞ、繼信を、抱き取つてやれ』
いったのは、義経だった。

射落された佐藤繼信は、義経のすぐそばにいたのである。

しかも、教経の矢が、的の義経へ飛んできたせつなに、繼信は、われから身をもつて義経の前に立ち、あるじの盾となつたのだつた。

だれよりも、その一せつなを、目に見たものは、義経であつた。——当然「もし、繼信なかりせば」と、命びろいの一瞬をも、義経は併せて、ぞつと、毛孔で知つたにちがいない。

『ぞ、さんねんっ』

と、かなたの教経が叫んだのと同時に、源氏の群れの中では、

『……わつ、兄者人っ』

と、泣くように喚いた者があつた。

繼信の弟、佐藤忠信に相違ない。

見ると。——間髪をいれず。

矢にあたつた繼信の体へ向かつて、教経の郎従——童武者の菊王丸が、獵犬のような素迅さで、飛びかかつていた。あるじの教経に代つて、すぐ、佐藤三郎兵

衛繼信の首を、かつ切ろうとするものらしい。

『うぬっ』

忠信は、兄の首を、奪らせまじと、蹴ふかく、矢を引きしぼつて、びゅつと放つた。

菊王丸は、繼信のかぶと首へ、手をかけたまま、

『——ぎゃっ』

と、ひと声発して、地へころがつた。

それを見ると、菊王丸の主人教経は、

『あな、不愍』

と、とつさに、馬を駆け寄せ、右手をのばして、菊王丸の体を、鞍わきへ拾いあげた。

その不敵な、行為を見て、

『得たり』

『怨敵』

と、忠信も、ほかの武者も、いちどに弦を切つて、教経へ射あびせたが、教経は、一転、馬を翻すかと思うと、浜の方へ一気に駆けもどり、汀の小舟のうちに、菊王丸の体を、馬の上からほうり投げた。そして、すぐまた。